

あなたへの言葉

——『伉儷月刊』と林淑華『生死恋』、及びその読者を例として

池田智恵

Words for you — “Kangli”, Lin Shuhua “Shengsilian” and readers

IKEDA Tomoe

Lin Shuhua (林淑華) is best known as the author of “Shengsilian (生死恋)” (1948). It is an autobiographical work by Lin and was serialized in the magazine “Kangli Monthly” at the end of the 1940s and was quite popular at that time. This article considers the creative activity of Lin Shuhua in relation to the magazine “Kangli Monthly” and its readers. In “Kangli Monthly”, Lin Shuhua first appeared as a contributor, then as the author of “Shengsilian”, and then as the host of “Kangli Xinxiang (伉儷信箱)”, a column of readers’ contributions, in which she sincerely answered the serious problems of life of the readers. This mutual relationship with readers also influenced Lin’s creative activities. In the “Shengsilian” and “Zhufu zhi you (主婦之友)” she uses for example a letter style and a “call to someone”, which are common in “Kangli Monthly,” and this gave them a structure that facilitated the sympathy of readers.

Keyword: Kangli, Shengsilian reader romantic fiction modern literature, Lin Shuhua, acceptance theory, magazine

キーワード：伉儷 生死恋 林淑華 言情小説 読者論 雑誌

はじめに

本稿は、1940年代後半の上海における通俗小説とそれを生み出した雑誌空間や、読者との関係を考えることを目的とする。いわゆる主流の文学作品において、40年代に質の高い文学作品が多く中国大陸で書かれたことはわざわざ指摘するまでもないだろう。そうした40年代における小説の変化は、主流の文学だけにはとどまらなかった。当時の通俗小説に関してもおそらく同じような変化を経験している。それは張愛玲が、上海において『紫羅蘭』に作家としてのデビュー作を掲載していることからもうかがえるだろう。『紫羅蘭』の主編は周瘦鵬であった。近代中国の通俗小説の牽引者の一人であり、『紫羅蘭』という雑誌名も、1920年代に周がやはり主編をつとめた通俗小説誌と同じである。1940年代における『紫

『羅蘭』は、程小青などが探偵小説を書いていることから、明らかに通俗小説誌である。こうした雑誌において周が張を見出して、掲載したというのは当時の通俗小説の空間が張愛玲の「沉香屑」のような世界を内包できることを示している。

そうした通俗小説の内容的な深まりの背景には一体何があるのか。筆者は、作品を発信する側だけでなく、それを受容する読者の感性の変化に注目して研究をおこなってきた。特に、1940年代の上海における通俗小説雑誌を中心にその読者と雑誌のあわいに注意を払い、読者投稿欄や読者への文芸コンテストから当時の上海に残された若い読者・創作者たちの感性の変化について考えてきた。その中から、当時、読者たちに自分の苦しい生活を吐露するという想像力が小説創作に結びついていくのが見えてきた。本稿では、そうした流れを新中国成立の前に確認できるものとして、1940年代末の『伉儷月刊』に掲載された『生死恋』という長編小説とその作者林淑華を中心に、当時の雑誌や出版をめぐる読者と作者の空間について考えてみたい。

一 林淑華とその周辺

『生死恋』とその作者林淑華、そして作品を掲載した『伉儷月刊』について、先行研究を整理しながらまとめておこう。

1 作者と作品について

まず、作者と作品について整理しておこう。

林淑華は、1919年1月1日に生まれ、祖籍は浙江平湖、元の名前は方徳閔、方健と言う名前を使ったこともあり、解放後には上海市文化局につとめ、後に方健明と改名した。2011年に『生死恋』の再版の際に、92歳と綴られているが、没年は不明である¹⁾。

林淑華の『生死恋』は彼女の自伝的な作品である。題名からも示唆されるように、その恋愛模様と結婚生活について書かれている。日中戦争下の上海を舞台にして、「梅」と呼ばれる女性が、家庭教師の徐惠民という青年と恋に落ち、家族の反対を受けながらも、徐が医師になるまで辛抱強く待ち、結婚するも、その後二年ほどの生活で、徐は肺結核を病んで亡くなる、という話が描かれている。

この林淑華の恋愛模様はかなりの評判となったようだ。「民国年間の十大愛情」²⁾という記事には、逸聞として魯迅と許広平、林徽因と梁思成、錢鐘書と楊絳郁など近代中国を彩る錚々たる文人たちの恋愛について紹介されている。その中に、『生死恋』の中の林淑華と徐惠民が入っており、「最凄美絶怨的純真愛情」として紹介されている。文学史から考えれば、林淑華は有名作家とは言えない。1930年代半ばから、雑誌や新聞に投稿を重ね、解放後には『問宝宝』や『新中国的好朋友』と言った作品を書いたと、2011年版の『生死恋』の単行本には紹介されているが、文学史上はほぼ無名である。ほぼ一冊『生死恋』の長編小説があるだけと言ってもよいだろう。

1) 林 (2011: 11)

2) 『吉林労働保護』(2014: 47)

『生死恋』は、1946年12月から『伉儷月刊』に連載（第1年第7期から第2年第12期）された。（呉（1948））単行本としては、1948年3月に初版が発行された後、五回版を重ねている³⁾。新中国以後にも、1982年に浙江人民出版社、83年に浙江文藝出版社、2011年に中国友誼出版公司から出版されている。新中国の文革などの大きな混乱を乗り越えても再版される魅力を持った作品であることがうかがえる。この作品がどのように文革を乗り越えたのかは、2011年版の「『生死恋』劫後余生的故事（代序）」に詳しい。

作者と作品は先行研究ではどのように位置づけられているだろうか。言及している論文はそう多くはないが、少し確認してみよう。王萌、樊洛平（2014：112）では、この小説の真実を語ろうとする自伝的色彩や、強烈な主観や感情が描きこまれていること、流暢な叙述のスタイルは、読者を作者の人生の中に呼び込み、そして作家自身をして戦争を過ごした年代の女性たちの成長を示すものとなっており、真に時代の記録となっていると指摘する。つまり実体験を語る、そしてその際に描きこまれている主人公の感情によって読者を引き込む作品であり、当時の人々の苦しみや成長を描き出していることが評価されている。

以上の経緯からも、『生死恋』は、発表当時からある程度影響力を持った作品であり、小説の主人公二人は人口に膾炙した存在となったと考えてよい。本稿では、この作品が1940年代に雑誌に連載され、その後単行本になっていく際の、読者と作者、そして雑誌という空間に注目していくため、解放後の経緯については、分析の対象としない。特に解放後の出版に関しては、筆者が確認した上海図書館所蔵の1948年発行の第三版と異同があり、かなり大きく手を加えられている。本稿では新中国以前に出版された版本を使用し、解放後の作品の変化については言及しない。

2 『伉儷月刊』とは

次に、この小説が掲載された『伉儷月刊』について確認しておこう。すでにこの雑誌に関しては、拙稿で言及しているが、新たな資料も見つかったので、それを参照しながら見ておきたい。

『伉儷月刊』は1946年6月から1948年10月まで刊行された。この創刊には上海清心堂という教会の「伉儷団契」が関わっている。以下、范軍（2020：45-48）を参考に整理しておこう。清心堂は、1860年に開かれた。元は「上海長老会第一会堂」と称したが、まもなくアメリカより宣教師が遣わされ、清心書院を開いた。この教会は書院の中で礼拝をおこなったので、「清心堂」として改称された。信徒の多くはこの書院の教職員やその家族、そして学生だった。初期は、教会の牧師と書院の院長を范約翰（John Marshall Willoughby Farnham, 1829-1917）が兼任した。范約翰本人も『小孩月報』（1875）などを刊行した。夏瑞芳、鮑咸恩、鮑咸昌、高鳳池などの商務印書館を創立に関わった人物は、清心堂の学堂で勉強している。

日中戦争終了後、上海清心堂は活発に活動し始め、当時清心堂を取り仕切っていた郭芝萍は、特に積極的で、「伉儷団契」を組織する一人でもあった。郭芝萍は当時新聞報館に勤めていた呉好好と話し合い、郭の教会関係の仕事の負担のため、名義上は発行人とするが、編集、投稿の処理、採算管理、印刷などの発行に関する全ての事務を呉が処理することとして、『伉儷月刊』を発行する運びとなった。

3) 林（2011：1）

この雑誌の発行は、宣教を大々的に行うというより、キリスト教の教義に基づいた家庭生活を提唱するものであった。それは、雑誌の掲げる投稿募集の要項からも明らかである。創刊号（1946年6月）に掲載されている「投稿七件事」を見てみよう。そこには、「本刊は家庭の実際的な生活を主とし、家庭の問題、婚姻の問題、夫婦生活、恋愛生活、家庭の収め方、子供の養育、医学的な常識、宗教的修養、各国風俗、各国の新著、および旅行記、小説、詩歌、エッセイなど、なんでも歓迎する」⁴⁾とある。もちろん宗教的修養についても触れられているが、家庭に関することが前に置かれ、項目として多くあげられていることは一目瞭然である。また、李頻（2003：441-442）では、この雑誌を、家庭の婦人雑誌は、そのジャンル自体の発展が大衆的な雑誌の発展史にとっては重要な位置を占めており、そうした角度から研究を進めればおそらく特徴が浮かび上がるだろうと位置付けている。

以上から『伉儷月刊』は、キリスト教的な背景を持ちながらも、女性、特に結婚した家庭に入っている女性を主に読者の対象とした雑誌であり、そうした意味から重要な位置を占める可能性のある雑誌であることがわかる。

二 林淑華の創作活動と読者との関わり

家庭における婦女を対象とした『伉儷月刊』において林淑華は『生死恋』を連載した。林淑華と『伉儷月刊』の関わりは、作家と作品掲載雑誌という他に違う側面がある。また、『生死恋』を出した後に『主婦之友』という小説作品を、雑誌とは関わりなく出版している。それについて、整理しながら、林淑華の創作活動と、雑誌、読者との関係を見ていこう。

1 『伉儷月刊』と林淑華の三つの顔

前述の李頻（2003：442-443）は、「『伉儷月刊』には、長編小説『生死恋』も連載された、当時かなりの反響を呼んだ。「伉儷信箱」を特設し、作者・編者と読者との意思疎通や相互作用を図ることに重きを置いた」⁵⁾と指摘している。この「伉儷信箱」について范軍（2020：48）ではこう指摘されている。「この方女史は当時『生死恋』を書きながら、雑誌の「伉儷信箱」のホストを勤めていた。「木毎女士」という筆名で答えていた」⁶⁾また、こうも書いている「主編の呉好好が読者の自由投稿から方健明という女性を見つけ（以後、「林淑華」という筆名を用いた）、彼女の文才を見出して、訪問した」⁷⁾と指摘している。この時方女史は肺結核を患っていて、貧窮と病苦の合間でどうしていいかわからなかったのを、原稿を書くことを勧めて稿料によって最低限度の生活を送れるようにしたことが記されている。ここから林淑華は、『伉儷月刊』では当初は読者投稿を送る読者として、それから林の筆名で『生死恋』の作者と

4) 本刊以家庭實際生活為主，舉凡家庭問題，婚姻問題，伉儷生活，戀愛生活，家政治理，兒童撫育，醫學常識，宗教修養，各國風俗，各國新著，以及遊記，小說，詩歌，小品等，均所歡迎。

5) 伉儷月刊物还连载过长篇小说《生死恋》，当时影响很大；特设的《伉儷信箱》，注重加强作者、编者和读者的沟通互动。

6) 这位方女士当时一面写作《生死恋》，一面为该刊主持“伉儷信箱”，用笔名“木每女士”主答。

7) 主編吳好好在讀者自由投稿中發現了一個叫方建明的女士（後用筆名“林淑華”）具有寫作才華，便登門拜訪。

して、また「木毎女士」（もしくは木毎）として「伉儷信箱」のホストとして読者投稿に答えていたという三つの顔があったことがわかる。

これは前述の読者との相互作用を強めるという『伉儷月刊』の性格をまさに示している事実だろう。また、林淑華は、解放後に『生死恋』が1966年6月の文革の展開に伴って、彼女の書いた作品がどのような扱いになるのか悩んだ時のことを次のように回想している。「わたしのこの本は、ただ二人の若い男女が封建的な圧迫に反対し、自主的な婚姻を得ようとするのと、不幸な境遇になることを描いているに過ぎない。それにあんなに多くの読者からの同情や励まし、応援をいただいた」⁸⁾。林淑華にとって『生死恋』を執筆・発表していた当時、読者からの大きな反響が意味を持っていたことは確かだ。

雑誌との関係で、ある人物が投稿者から作家へ、そしてより積極的に読者に関わる姿というのはなかなか確認できない。そこで林淑華の三つの顔を整理することによって、当時の雑誌・読者・作家が織りなす空間を、その中で林淑華がどのような創作を展開したのかを考えてみたい。それはおそらく当時の読者と作者に共通する想像力を考える上でも大きな手がかりとなるだろう。

（1）雑誌への投稿者として

林淑華の雑誌への投稿者としての側面を整理しておこう。池田（2021）において、筆者は、すでに『伉儷月刊』の投稿欄と、そのホストである「木毎女士」についてある程度分析を行なっているので、それを活用しながら整理していく。該当論文を書いた時点では、『伉儷月刊』に連載された小説に関しては、まだ研究が及んでおらず、また范軍の論文を確認できていなかった。本稿は、池田（2021）では考察できなかったことを、その論文を使用しながら明らかにしていきたい。

以下は林淑華が「木梅」の名前で『伉儷月刊』に投稿した文章の一覧である。

- 「寄——」（第5期 1946年10月）
- 「看了「談再醮」之後」（第7期 1946年12月）
- 「別離」（第7期 1946年12月）
- 「介紹一處合乎理想的托兒所」（第9期 1947年2月）
- 「今日中國婦女應有的覺悟」（第10期 1947年3月）
- 「大寶和小寶」（第11期 1947年4月）
- 「病中日記」（第2年第2期 1947年7月）
- 「給關懷我的朋友」（第2年第3期 1947年8月）

「寄——」は、彼女が同性の友人宛に、自分の苦境、夫が死に一人で子供を抱えてどうしたらいいか、一人で生きていきたいということを綴ったものだ。この文章は反響を呼んだ。次号の第6期（1946年11月）には編集にも関わる周振甫が、木毎が求婚者にあてて再婚の断りについて書いたものと誤解して、

8) 我这本书只不过是写两个青年男女反对封建压迫，争取婚姻自主和一些不幸的遭遇而已；何况还受到那么多读者的同情、鼓励和支持。林淑華（2011：3）

「談再醮 讀木每女士「寄——」」を寄せる。それに対して、木毎は第7期（1946年12月）の「看了「談再醮」之後」で反論する。同号に周振甫からの「答木每女士」が掲載されている。それ以降、彼女は常連の投稿者となっていく。彼女の投稿は、彼女の生活に関連したことだ。「別離」「紹介一處合乎理想的托兒所」「大寶和小寶」は彼女の二人の子供について、特に木毎が肺結核のために病院で隔離生活を送らなければならないことについて、母親から子供への想いが綴られている。「今日中國婦女應有的覺悟」は編者の呉好好に頼まれて書いたものだ⁹⁾。五四新文化運動以来、女性の解放は進んだが、それはまだ表面的なもので、女性たちに本当の意味での覚悟がなく、「解放」の本当の意味を理解していないことを説く。「給關懷我的朋友」では、次号にあたる第2年第4期から読者投稿欄である「伉儷信箱」を担当することを受けて、雑誌と雑誌を契機に彼女と実際に交流し、助けてくれた人に、また雑誌を通して交流してくれたと思われる読者に礼を述べ、実際にどんな援助を受けたかが細々と書かれている。その中で、ある読者に対してこんなふうに書いている。「わたしの原稿に注意を払ってくださってありがとうございます。特に程さんは、こんなふうにも言ってくださいました。『伉儷』が送られてくるたびに、まず目次を見て、木毎が書いたのがないかどうか見て、もしなかったらとてもがっかりするのだと。これはわたしがものを書くのにとっても大きな励ましとなりました。」¹⁰⁾

木毎は『伉儷月刊』の中で悲劇の渦中の女性としてまずは登場した。それに対して編集側の周振甫が反応し、かつ呉好好なども彼女の苦境を救うために投稿を促す。それによって、木毎は常連の投稿者となり、彼女が自分の生活について書いたものによって、読者からも支持を集めた。雑誌の読者の側から考えると、木毎という苦境にある女性がその生活を立て直し、立ち上がっていくその様を雑誌上で追っていたことになる。

木毎自身もそうした読者からの励ましを糧にしたことが綴られている。つまり読者と雑誌の合間の相互作用のはざまから、ある女性が自分の足で歩くようになったことが見えてくる。

(2) 『生死恋』の作者として

では次に、『生死恋』の作者とその読者、雑誌との関係を見てみよう。

まず簡単に、『生死恋』について整理しておこう。『生死恋』は第1年第7期（1946年12月）から第2年第12期（1948年5月）まで『伉儷月刊』に連載された。単行本は1948年3月に初版が、1948年10月には第3版が出版されている。本稿では、上海図書館所蔵の第3版を使用する。

『生死恋』は「身世・初戀・拒婚・小別・抗命・母喪・壓迫・重逢・戦争・苦難・熱戀・畢業・波折・激變・釋嫌・枝棲・新婚・結晶・鬪牆・罹病・永別・長恨」の全部で22章からなる長編小説である。この小説は、林淑華とその後夫になる徐惠民との恋愛と結婚を描いている。物質的には何不自由なく暮らす「梅」¹¹⁾は家庭教師としてやってきた貧窮家庭出身の徐と恋に落ちる。親からの結婚話を断るも、徐と

9) 呉好好 (1947)

10) 謝謝你們對我寫稿子這樣的注意。其中程太太更說：每一期伉儷寄到的時候，先要在目錄看看，有沒有木每寫的，而在看不到的時候則非常失望。這對於我的寫作，實在是一個極大的鼓勵。

11) 作中で林淑華に相当する女性は、徐惠民から「梅」と呼ばれている。これは、林淑華が投稿者として木毎と名乗ったのと無関係ではないと思われるが、特に木毎という筆名の由来に関しては言及はされていない。

の結婚は徐の家庭を理由に反対される。徐は医師となることを決意し、医師となってから結婚することを誓う。その後二人は戦火の中も八年の間辛抱する。徐が医師となって結婚するも二年という短い時間の間に夫は肺結核のために1944年12月2日に亡くなってしまふ。

この作品に関して、1940年代に女性の学生作家などを見出した胡山源が序を寄せているが、その序（胡山源（1948））では、この作品について巴金の『家』『春』『秋』を読んだ時のような印象を覚えたとし、「彼女がやり遂げたものは、彼ら夫妻の悲喜交々や出会いと別れに関係しただけでなく、読者に旧式家庭や旧社会のよくないところを知らしめたところである」¹²⁾と述べている。

この作品は、どのように書かれたのだろうか、呉好好の序を見てみよう。呉好好（1948）によれば、林淑華と最初にあった時は、彼女は肺結核を患っており、精神的にもかなり落ち込んでいた。二人の女児を残して、夫が亡くなって一年半経っており、貯金もなく、生活は苦しいという不幸な境遇を話した。歳は若いのに、全くの希望を失っていて、未来への展望がなかったという。その時、呉は彼女には二つの問題があったと述べている。「意識を昇華させる（原文：意識的昇華）」と「生活の金銭的援助（原文：生活的資助）」である。そこで呉は彼女に経験を長編小説にすることを勧めた。林は、長編を書く勇気がないこと、病気のために執筆できるかどうか、途中で書けなくなった場合にどうしたらいいかわからないことを述べたが、呉は、「これは新たな希望であり、目の前の生活の環境を変えることのできる一つの試みである。人生に希望はなくてはならないもので、希望とは生命の源である」¹³⁾と述べて、作品を書かせた。その後、林は単行本にする際には、自分で紙の都合や、広告の話をつけるなどの奔走をしたことが綴られており、『生死恋』を書き始めた頃と全く変わったことを彼女自身が呉に告げたことが書かれている。

ここから、雑誌の編集部が積極的に関わってある読者の生活を変えようとしたことがわかる。

さて、林淑華の角度からこの執筆について振り返ってみよう。1948年発行『生死恋』単行本の自序を見てみると、1944年に夫を亡くしたあと、1945年10月18日に林淑華も肺結核のために、入院する。幸いにも夫とは異なって急性肺結核ではなかったため、なんとか持ち堪え、1946年7月には、体のためにはいいことではないとは知りながらも、生活のために「投稿を始めた（原文：走上投稿之路）」。文章を書き始めて、自分の書くものに近い雑誌や新聞副刊に投稿し始める。そうした投稿の中で呉好好や郭芝萍や『大公報』『家庭』を編集する劉新漢、「家」の編集である黄嘉音と出会い、彼らから励ましをもらったことが書かれている。その中で呉から長編を書くように勧められ執筆に臨んだ¹⁴⁾。ここからも、林淑華が、生活のために投稿をするようになった家庭で、いろいろな人物に出会い、そこから援助を受けていく様子が書かれている。

では読者とは、彼女にとってどのような存在だったのだろうか。この序の中で彼女は再三にわたって読者について言及する。例えば、「わたしが特に感動したのは多くの読者からの励みでした」¹⁵⁾、『伉儷

12) 她的成就，並不只有關於他們夫妻二人的悲歡離合，卻使讀者明白了舊家庭，舊社會的不良，發生了深刻的印象：舊家庭，舊社會非徹底改革不可！

13) 這是一個新希望，也是改變目前生活環境的一個試驗

14) 林淑華（「自序」『生死戀』，1948）

15) 而尤其是使我感動的事：許多讀者們的勉勵

月刊』に一期ずつ発表し始めた後に、意外なことに、知っている友人から称賛され、知り合いではない多くの読者たちから慰めや励ましをもらったことだった。」¹⁶⁾ 呉から毎回読者からの手紙が送られてくるたびに感動して涙を流したことも書かれている。また彼女は自分の文才のなさを嘆いて、読者にどうか自分の作品のそうした面について、許してほしい、また指導してほしいとすら述べている。

こうした読者との関わりは、林淑華にとってかなり大きなものだったようだ。林淑華は、「三版後記」¹⁷⁾で、「生死恋」が1948年3月に初版されたとき、一ヶ月もしないうちに三千冊が売り切れ、5月に三千冊を再版した時も短期間で売り切れてしまい、その後も書店からもそして読者からも手紙が舞い込んだために第三版となったことを述べている。この中で読者からの支持に感謝し、その当時「重慶、北平、湖南、天津、広東、貴州、香港、台湾」の読者からも手紙が舞い込み、上海の読者からの手紙が最も多く、全て引き出しにしまっているが、それももういっぱいだという。そしてその内容についても次のように分類する。①作者に対する同情や称賛、②二人の子供と作者の写真を見せてほしいという要望、③住所を教えてほしい、作者に会いたいというもの、④手紙を通じて友達になりたいという要望、⑤その他、小説に登場した人物のその後について訊ねる。この五項目について「ここで公開して答えましょう（原文：在這裡一次公開的答覆）」とかなりの紙幅を後半費やして回答している。そして、不幸な境遇に陥ってから、多くの友人の助けを得たが、世界にはまだ悪人の方が多く、良い人は少ないと言いながらも、その後こんなふうに読者について言う。「現在多くの見知らぬ読者がわたしにこんなに深い同情を寄せてくださって、感動に耐えません」¹⁸⁾ さらに、四川省の女子中学の女学生「謝自君、蘇順英、楊澤民、劉憐君」の数名からの手紙を紹介する。その手紙の内容は、『生死恋』を読んでから林淑華に深く同情し、かつ徐惠民のような医師がまた現れることを望み、小説の中で封建的な人物として描かれる徐の兄や、林淑華のような父親は歓迎しないと述べる。これに対して、林淑華は次のように述べる。

こうした言葉は、わたしたち若い年代がいかに光明に憧れ、暗闇を嫌悪しているかを表しています。光明とはまさに未来の理想世界を兆しており、暗闇とは、古く道理に合わない封建制度を代表しています。…（中略）…新しいものへとまだ変わらず、古いものがまだ存在している今日、まず苦しむのはわたしたちなのです。¹⁹⁾ 林（「三版後記」、1948：11）

林淑華は積極的に読者と対話する姿勢を見せており、彼女の創作の下支えに読者が存在することが確認できる。そして手紙の引用とそれに対する答えからもわかるように、彼女は、読者と共に、封建主義を打倒した新しい世界を希求している。

林淑華と『生死恋』は、まず彼女の苦境を救うための方法として『生死恋』が執筆され、そしてその

16) 自從生死戀在「侂儷月刊」按期發表以後，意外地，得到了我所認識的友人的讚許，和不認識的許多讀者的慰勉。

17) 林（「三版後記」、1948：10-13）

18) 現在看到這許多不認識的讀者，給我這樣深切的同情，不由得不是我感動。

19) 像這種言語，充分表露出我們這年輕的一代，是怎樣憧憬着光明，嫌惡着黑暗；而這光明卻正象徵着未來的理想的世界，黑暗卻代表着古舊不合理的封建制度。…（中略）…在這新的尚未蛻出，舊的還在負隅的今日，首先要吃苦受難的，卻是我們這一群。

『生死恋』の読者からの支持が彼女に筆をとらせ続けた。林淑華について読者は新しい世界を希求するという共感を持ち、林は作者との対話の姿勢を常に見せていたと言えるだろう。

（3）投稿欄「伉儷信箱」の回答者として

『伉儷月刊』に「伉儷信箱」が開設されたのは、第2年第4期（1947年9月）で、それから上海図書館で確認できる最終号である第3年第4期（1948年10月）まで続いた。これはそもそも読者の要望に応える形で始まった投稿欄であった。興味深いことにこの投稿欄で、木毎は林淑華であるとは直接的には名乗っていない。『生死恋』と「伉儷信箱」が同時に掲載される場合には、木毎と林淑華のそれぞれの名前が目次に並んでいた。²⁰⁾つまり、途中から読み始めた読者には必ずしも二人が同一人物かどうかははっきりとしない。

木毎は投稿欄の中で15人が寄せた失恋、配偶者選び、旧式結婚の弊害、女性の生き方に関する問題などに真摯に答えている。この分析は、池田（2021）において行っているもので、詳述は避けるが木毎は、当時辛い状況にある男女をどうにかして「美満幸福的家庭」に導こうとしている。この投稿欄はかなり反響を呼んだ。

第3年第1期（1948年7月）の「伉儷信箱」に「告信箱讀們〔ママ〕」において木毎は「9ヶ月の間に、読者の90通もの手紙を受け取りました。そのうち紙面で発表したもの以外は、ほとんどすでに直接手紙で返事をしました」²¹⁾とあり、雑誌に投稿された読者の投稿はそう少なくはないこと、かつまたそれらを誌面に紹介する他に直接返事をしていたことが書かれている。その他にも投稿者によっては、木毎は相談者に直接会いに行ったことも記されている。

木毎は林淑華として同時期に『生死恋』を連載しながらも、読者投稿欄において読者の悩み真摯に向きあい、かつての彼女と同じように窮地に陥った人々を助けようとしていたのである。

2 『主婦之友』の作者として

以上、『伉儷月刊』と林淑華の創作及び、木毎としての投稿者と投稿欄のホストという側面について考えてきた。ここで、もう一つ他の林淑華の小説作品について考えたい。

『主婦之友』は1948年6月に新紀元出版社から出版された。この作品は、「一、生辰」から「三五、幸福的家庭」の一節一節を「雲」という主婦の日記の体裁で書いている。目次上は三十五節だが、「二九」と「三〇」の間に、「不要太寵愛孩子」が入っている。一覧は以下の表の通りである。一節ずつは二頁から四頁ほどと長くはない。

20) 范軍（2020）において、林淑華と木毎が同一人物である根拠の出典は示されていないが、『生死恋』の「三版後記」（林（1948））において示される「大寶」と「小寶」は彼女の二人の娘であり、木毎が「大寶和小寶」（第11期 1947年4月）を書いていることから二人が同一人物であることは明らかである。

21) 九個月裏面，一共接到讀者的來信九十封。其中除了伉儷陸續發表的函件外，其餘的，差不多都已直接去函答覆了。木毎（1948）

一	生辰	十一月三十日
二	一個醫生的妻子	十二月二日
三	家庭快樂	十二月四日
四	鬧彆扭	十二月五日
五	臥室的裝修	十二月八日
六	座談會	十二月十八日
七	婆婆與媳婦	十二月二十日
八	孕	一月五日
九	廚房的清潔	一月十日
一〇	怎樣應付娘姨	一月十日〔ママ〕
一一	家庭醫藥	一月十五日
一二	準備做一個好媽媽	一月二十日
一三	遠足	二月十日
一四	接待朋友	二月二十六日
一五	寂寞的排遣	三月十八日
一六	他病了	三月二十日
一七	他需要我的安慰	三月二十一日
一八	烹飪的技術	四月一日
一九	修飾	三〔ママ〕月十九日
二〇	生產	九月十五日
二一	種豆	九月二十六日
二二	產婦	十月三日
二三	小天使	十月十日
二四	哺乳	十一月二十九日
二五	嬰孩的食物	十二月九日
二六	百日咳	一月十六日
二八	姑嫂之間	一月十七日
二九	麻疹	三月十七日
	不要太寵愛孩子	四月二日
三〇	不要恐嚇孩子	四月三日
三一	結婚兩週年	十月十四日
三二	疑雲	十一月二日
三三	丈夫的女朋友	十一月十五日
三四	抓住丈夫的心	十一月二十二日
三五	幸福的家庭	十二月十日

この一覧からも明らかだが、これは「雲」の新婚生活と妊娠、出産、そして夫の浮気を描く。夫は医師の張偉成という人物である。「名前は「生死恋」の名前と異なっているが、しかし、性格などの描写を見る限り、同一人物であることがわかる（ただし最後の方の幾つかの節は、本人とは関係がない）²²⁾」とあるように、読者から見れば、これは「梅」と「徐惠民」の話、もしくは林淑華自身の話、またはその

22) 雖然名字和生死戀中的名字不同，但是從性格描寫上看來，我知道是同一個人（但本書末了的幾節，卻與他無關）黃（1948）

延長線上にある物語として読めるようになっている。内容は、上記の表からも推察可能だが、子供の養育、料理の方法、家庭の医療、社交、親戚関係、夫婦関係などさまざまな家庭を運営する「主婦」に関わる知識が詰め込まれている。

この作品はどのように書かれたのだろうか。林淑華は『主婦之友』の「自序」で次のように振り返る。1946年7月から、家庭に関わる多くの原稿を『申報』、『大公報』と『大晩報』に発表し始めた後、かなり原稿が溜まっていたが、どれも感想や心得のようなものに過ぎず、一冊にまとめようという考えはなかった。だが、「今年の3月になって拙著の『生死恋』が出版されると、ある読者がわたしに、過去に新聞に発表した文章を集めて単行本にしてはどうかと勧めてくれました」²³⁾ その手紙を受け取った当時は、『生死恋』関連の事務で忙しく、着手できなかったが、友人がばらばらに書いた原稿を集めてくれた。そこで林は古い原稿に手を入れて、『主婦之友』としたのである。残念ながら、この元となる原稿を調査することはできなかったが、林がどのように手を入れたかは、次の言葉からある程度うかがいしれる。「読者が読んだときにつまらないと感じないように、できる限り原稿を面白くし、読者が面白さを感じながら幾らかの家庭の常識を得られるようにしました」²⁴⁾ 考えられるのは、そもそも家庭にまつわる一つ一つの常識や心得を書くだけの記事だったのを、新婚夫婦の生活を軸に入れて整理し直したということではないだろうか。

しかも興味深いのは、この『主婦之友』で展開されているのは『生死恋』では描かれていないところだということだ。『生死恋』がかなり自伝的であると作者も周囲も言っているとしても、『主婦之友』が同様に自伝的であると考えるのは少々飛躍がある。林淑華は確かに実生活や彼女が見聞きした情報から原稿を書いたというのは、生活に逼迫して投稿を始めたことから想像に難くないが、実際の彼女の生活に即していたかどうかは不明である。『生死恋』は、全二十二章のうち第十七章が「新婚」で1942年10月14日に「梅」と徐惠民がようやく結婚を果たし、第十八章「結晶」で妊娠と出産が描かれる。二人の新婚生活はほとんど描かれていないが、『主婦之友』では、「八 孕」で妊娠が発覚し、「二〇 生産」で出産となっている。『主婦之友』は『生死恋』では描かれなかった二人の新婚生活として読むことが可能になっているのだ。ただし、『主婦之友』では夫婦の別離は書かれない。夫の浮気により、危機に陥った夫婦関係を修復し「幸福的家庭」を持続し続けるという結末を迎えている。

以上から、もとは夫の死後、肺病を病み、困窮生活の果て生活のために、林淑華が生計を立てるために投稿した原稿であったが、それを『生死恋』ののちに、読者の声を受けて、『生死恋』の二人の新婚生活を描いたものとしても読めるよう改作したのが『主婦之友』と言える。これもまた、雑誌や新聞への投稿と投稿者としての林淑華、そしてそこから読者の声を受けて本としたものであり、読者の支持を受けて存在した作品だと言えるだろう。

23) 到了今年三月，拙著生死戀出版後，有一位讀者來信慫恿我，要我把過去發表在報上的，文稿搜集起來，出一冊單行本。

24) 為避免讀者閱讀時枯燥乏味起見，我竭力把它寫的趣味化一些，使讀者在趣味之中，獲得一些家庭常識。

三 林淑華作品における共通点

林淑華の『生死恋』がここまで支持を受けたのはなぜなのだろうか。もちろん、それは彼女の生き方に多くの読者が共鳴したのだろう。その共鳴は、彼女が投稿者としてまずは『伉儷月刊』に投稿したこと、その後投稿欄のホストとなったこと、その立ち直っていく様子を雑誌の読者たちが、リアルタイムで見ていたこととは無関係ではないだろう。では、作品の中でそうした共鳴を呼ぶような仕掛けはあるだろうか。実は、林淑華が書いた『伉儷月刊』への投稿や、投稿欄のホストになったときの記事、小説『生死恋』と『主婦之友』の表現技法には共通点が見られる。そしてその共通点は、『伉儷月刊』に掲載された、他の投稿者たちの投稿とも大変似通っているのだ。

池田（2021）において筆者は、「『伉儷』という男女平等の夫婦関係、そしてそこから導き出される家族を投稿者の投稿、特に書簡体の記事を多く掲載することで描いていく雑誌であった」と指摘した。『伉儷月刊』においては、亡き家族や、もしくは別れた恋人になど多くの誰かに向かって書かれた書簡体の投稿が多く寄せられており、書簡体を取らずとも誰かへの呼びかけのような作品が見られる。

『生死恋』は完全な書簡体を含んでいるわけではないが、最終章である「二十二 長恨」は、それ全体が亡き夫に対する「梅」の呼びかけである。「惠民！ただ時間がいつの間にやら過ぎ去っていきます。あなたがわたしから去って、もう三年になりました！この三年の間、あなたのためにどれだけ涙を流し、どれだけの辛酸を舐めたと思いますか？」²⁵⁾と彼女が夫亡き後にその親類から受けた仕打ちや、経済的な困難、そして自分も肺結核になったことを痛切に綴り、そして「最後に、あなたに言いたいことは、これからわたしは勇敢に戦い続けます、強く生き続けます……！」²⁶⁾と締めくくっている。手紙ではないが、それに酷似した形式をとっている。

書簡体は実際に林淑華は投稿や作品の中で使用している。

林淑華が当初木毎として投稿し、話題となった「寄——」（第5期 1946年10月）は、「××へ あなたの家を出てから家へ帰るまでの間、なんとも言えない気持ちが胸の中に渦巻いていました！」²⁷⁾と始まる同性の友人への手紙である。この手紙の中で木毎は自分の境遇と女性解放への遠い道りを嘆く。実はこうした、書き手に親しく、よく手紙をやりとりする同性の友人は『生死恋』にも『主婦之友』にも登場している。『生死恋』では「梅」と徐惠民の恋を応援し手紙のやり取りの仲立ちとなる「璧姐」が存在し、『主婦之友』の最終節にあたる「幸福的家庭」自体が「蘊姊姊」に当てた手紙である。

特に、木毎の「寄——」と『主婦之友』の最後の「蘊姊姊」への手紙の対比は興味深い。木毎は、友人の再婚の方がいいという提案に対して否と答え、「よく考えてください。現在の中国社会でわたしたち女性はすでに完全に解放されたのでしょうか？ あなたは一言、「違う」と答えるでしょう。」²⁸⁾「結婚

25) 惠民！荏苒歲月，如水流光；你離開我，已經三年了！在這三年中，我為你流了多少眼淚？我為你嘗了多少辛酸？林（「二十二 長恨」，1948：168）

26) 最後，我要告訴你的事：從今以後，我仍將勇敢地奮鬥下去，堅強地生活下去……！林（「二十二 長恨」，1948：168）

27) ××：走出你門口，踏上歸途，心裏說不出是一股什麼情緒！木毎（1946：38）

28) 請你仔細地想一想：我們婦女在目前的中國社會裏，是否已經得到完全的解放？你當然回答我一聲「不」。木毎（1946：38）

は、女性の最後の行き場ではありません！もちろん女性にとって素晴らしい行先というわけでもありません！」²⁹⁾と当時における夫を亡くした女性が再婚した方がいい、そのようであれば生きるのが難しいという状況、当時の女性の状況に対する違和感を強く表明している。

だが、『主婦之友』においては、夫に浮気された妻として「蘊姊姊」に「一個幸福的家庭是怎样建築起來的問題」³⁰⁾を討論したいと持ちかけるのである。「雲」はこの手紙の中で、「仮に離婚したとして、本当に痛い目を見るのは夫ですか、それとも妻ですか？」³¹⁾と書き、「雲」は「わたしは彼と絶対に揉めたくなかった」³²⁾と書き、どのように夫の気持ちを取り戻して「私たちは、前のように気持ちが非常に通じ合った夫婦となり、円満で幸福な家庭を築いています」³³⁾と言う。そのために以下、夫には常に誠実に（待之以誠）、夫に優しくする（愛護體貼）、何でも話す（坦白無私）、夫に信頼されるために節約に励む（克苦節儉）、使用人に任せず家事や育児は自分でやる（躬自操作）、子供ばかりを見ずに夫のことも慰める（不要偏袒）、夫が疲れて怒った時にも（溫柔忍耐）、経済的・物質的なことなどではなく、夫との精神的なつながりに楽しみを見出し（知足常樂）、夫からの意見は受け入れる（從善如流）、義理の親を世話する（孝親尊張）、これら十の心得を披露する。

そして最後にこう締めくくっている。

わたしは、わたしたちが幸せな家庭であるだけでなく、あなたたち（原文：你們）にも、世界のすべての夫婦が、皆幸福な家庭であることを願っています。これがあなたに手紙を書いた一番の目的です。³⁴⁾

林（『主婦之友』，1948：78）

ここで「雲」は「蘊姊姊」に宛てた手紙でありながら「你們」と呼びかけており、読者を想定したものは明らかだろう。

この作品に書かれている心得は、木毎が訴えたのは異なり、当時の男女の不均衡を受け入れ、妻は夫に浮気され、離婚したとしても不利であるから、何とかお互いの感情を擦り合わせ直して「幸福的家庭」を作るべきだというものだ。これは実は、木毎の「伉儷信箱」の中で彼女自身が訴えてきたものでもある。木毎は厳しい境遇の女性たちに女性解放という理想は持ちながらも、現実的なアドバイスをし続けた。そしてそれによって相談者たちが、「美滿幸福的家庭」を築けるように再三にわたってこのフレーズを投稿欄の中で使用している。

つまり、『伉儷月刊』の中に溢れる書簡体のような呼びかけの、さまざまな読者の声が飛び交う空間の中に、林淑華はまずは木毎として書簡体の形を借りて自分の心の声を吐露し、そうした表現技法を自ら

29) 結婚並不是婦女最後的歸宿！當然也不是婦女的良好的出路！木毎（1946：40）

30) 林（『主婦之友』，1948：74）

31) 即使離了婚，吃虧的究竟是丈夫，還是妻子呢？

32) 我決不想和他鬧翻（主婦之友，1948：75）

33) 我們依然變成了一對感情極融洽的夫婦，仍擁有一個美滿幸福的家庭 林（主婦之友，1948：75）

34) 我不但希望我們自己有一個幸福的家庭，也希望你們，以至普天下的夫婦們，都有一個幸福的家庭；這就是我要寫這封信給你的最大的目的。

の小説の中でも使っているのである。そして、『主婦之友』では、苦しい状況でも「幸福的家庭」を築くために女性は男女不均衡な状況を受け止めてでも生きていくべきであると「伉儷信箱」で相談者たちにアドバイスしたのと同じことを言っているのだ。林淑華の作品が、読者の声が満ちた雑誌の中に登場し、そしてその影響を内包する形で作られていることが確認できるだろう。

おわりに

以上、林淑華の小説作品『生死恋』と『主婦之友』を『伉儷月刊』の雑誌空間と一緒に考えてきた。明らかになったのは以下のことである。林淑華には『伉儷月刊』上で、最初に投稿者木毎として、次に「伉儷信箱」のホスト木毎として、そして『生死恋』の作者としての顔があった。『生死恋』の創作の背景には、苦境に陥った投稿者である林淑華を雑誌が援助し、その雑誌の編集部と読者の励ましによって林淑華が立ち直った。同時に林淑華は「伉儷信箱」のホストとして、苦境に陥った人々にアドバイスをし、他の人にも生き続ける勇気を与えようとした。そうした彼女の生き方は大きく創作にも影響を与えており、彼女の描く作品には誰かへの呼びかけが描きこまれ、『主婦之友』には、男女の不均衡を受け止めながらも生き抜くために「伉儷信箱」で訴えた「幸福的家庭」を作るという言葉が盛り込まれている。

これは1940年代に見られた自分の苦境を吐露するという想像力がいかに作品になっていくか、そうしたことを読者がどう受け止めていたかを考える上で非常に面白い。読者は積極的に雑誌に投稿し、雑誌は積極的に読者に関わった。その相互関係の中から、林淑華という作家が生まれていったのである。もちろん、『伉儷月刊』が稀であるという指摘はできるかもしれない。だが、『伉儷月刊』は短命に終わった雑誌ではない、雑誌運営が難しい時代において、ある程度長期に雑紙をもたせたというのは、支持者が多いということであろう。『生死恋』が第五版まで発行されたというのも、その読者一もしくは林淑華の運命に共鳴した人、心を寄せた人が多いということを意味しているのではないだろうか。

本研究は JSPS 科研費課題番号一八 K 一二三一三の助成を受けたものである。

参考文献一覧

- 李頻 (2003) 『大衆期刊動作』 中国大百科全書出版社
- 林淑華 (2011) 「『生死恋』 劫後余生的故事 (代序)」 『生死恋』 中国友誼出版公司 1-11
- 『吉林労働保護』 (2014) 「民国年間的十大愛情」 『吉林労働保護』 1: 47
- 樊洛平・王萌 (2014) 『海峡兩岸女性小説的歷史流脈与創作比較』 人民出版社 112
- 范軍 (2020) 「周振甫与『伉儷月刊』」 『出版参考』 12: 45-48
- 池田智恵 (2021) 「人生を再建する読者たち：『伉儷』における読者投稿欄を例として」 『關西大學中國文學會紀要』 42: 219-245
- 編者 (1946) 「投稿七件事」 『伉儷月刊』 1-1: 97
- 呉好好 (1947) 「編後散記」 『伉儷月刊』 1-10: 100
- 呉好好 (1948) 「呉序」 『生死戀』 第3版 西風社

あなたへの言葉（池田）

- 胡山源（1948）「胡序」『生死戀』西風社
木毎（1948）「伉儷信箱」『伉儷月刊』3-1
木毎（1946）「寄——」『伉儷月刊』1-5：38-41
林淑華（1948）「自序」『生死戀』西風社
林淑華（1948）「三版後記」『生死戀』西風社 10-13
林淑華（1948）「自序」『主婦之友』新紀元出版社
林淑華（1948）『主婦之友』新紀元出版社
黄嘉音（1948）「黄序」『主婦之友』新紀元出版社
林淑華（1948）「二十二 長恨」『生死戀』西風社 168
林淑華（2011）「代序」『生死恋』中国友誼出版公司 1-11

